

「資本論を読む会」便り

2025.1.18 No. 94

12月は久々に新しい参加者をお迎えしました。互いに自己紹介したあと、早速、資本論に取りかかりました。今回読んだ箇所は次の通りです。

第Ⅰ部: 第1篇 第1章 第3節 価値形態または交換価値 (A 単純な… の前まで)

第Ⅱ部: 第3篇 第12章 第3節 マニフアクチュアの二つ基本… (第5-11段落)

※ 編集人の復習ノート。本文・報告・検討事項・議論などの要点を簡単に紹介します。段落は、大月書店の全集版の本文の字下げと傍注の付け方で区切っていますが、原則通りでない場合もあります。段落番号の後の小さい字は、(原著ページ番号)と段落の出だしなどです。

第95回

第Ⅰ部 第1篇 第1章 第3節 価値形態または交換価値

第1節で「研究の進行は、われわれを、価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値につれもどすことになるであろう」と予告されていましたが、それがこの節です。

第1段落 (62)「商品は、使用価値または商品体の形態をとって、…」 ～

- 商品は、使用対象であると同時に価値の担い手であるから、二重の形態すなわち使用価値の形態と価値形態を、持つ。
- 使用価値の形態は、商品体そのものであり、商品の現物形態である。
- 価値形態とは価値の現象形態のことである。価値は、いくら商品を見ても見つけることができない内在的なものだが、誰の目にも見えるような形になって現れている。

ある物が商品であると分かるのは、その物が使用価値の形態と価値形態を持っている、したがって使用対象であると同時に価値を担っていることが一目で分かるからです。

使用価値は商品そのものの姿(使用価値の形態)として現われているということですから、これは一目で分かります。

ところが価値のほうは、商品を見ても見つけられないが誰の目にも見えるような形になって現われている、と言うのですから、??となってしまう。

そこで、次の段落で謎解きをします。

第2段落 (62)「商品の価値対象性は、どうにもつかまえない…」 ～

- 商品の価値は自然素材を全く含まないから、一個の商品を念入りに調べても、それを価値物として掘むことはできない。
- 商品は人間労働という同じ社会的な単位の表現であるかぎりでのみ価値対象性を持っている。ゆえに、商品の価値対象性は純粋に社会的である。したがって、価値対象性は商品と商品との社会的な関係のうちのみ現れる。
- そこで、研究は、価値が現象している形態、交換関係に戻ることから始める。

商品は人間労働という一つの同じ社会的実質の表現である限りで価値対象性を持つのだから、商品の価値は純粋に社会的なものであること、したがって商品と商品との社会的関係の

中にだけ現われる、と言っています。ここが重要で、だから交換関係に戻る、となります。

本文に「人間労働という同じ社会的な単位」という表現がありますが、ここの「単位」を m や kg などの仲間と捉えると意味が分かりません。岩波文庫版では「同一の社会的等一性である人間労働」となっています。編集人はこれを「人間労働という一つの同じ社会的実質」と言い換えて理解しました。

第3段落 (62)「諸商品は、それらの使用価値の雑多な現物形態…」 ～

- あらゆる商品は一つの共通な価値形態——貨幣形態を持っている。
- ここ(第3節)では、商品の価値関係に含まれている価値表現の発展を、もっとも単純で目立たない姿態から貨幣形態にいたるまで追跡する。
- これによって、貨幣の謎も消える。

商品の価値を貨幣で表示したものが価格であり、価値が目に見える形で現われています。商品は、目に見える使用価値とともに、価格という貨幣形態によって自身の価値を目に見えるものとして表し、商品であるという形態を持つことになります。

「貨幣の謎」とは何かについて本文に説明はありません。レポーターから久留間鮫造「貨幣論」によって、次のような説明がありました。

等価形態におかれる商品の自然形態が、そして発展すれば金銀の自然形態が、直接的な交換可能性というまったく社会的な性質を生まれながらに持っているように見える、ということです。

なお「等価形態」の意味は、この第3節 Aに入るとすぐに説明があります。

第4段落 (62)「最も単純な価値関係は、明らかに、なんであろうと…」 ～

- 2商品の価値関係は、1商品のための最も単純な価値表現を与えるから、ここから始める。

第Ⅱ部 第3篇 第12章 分業とマニファクチュア

第3節 マニファクチュアの二つの基本形態 ——異種のマニファクチュアと有機的マニファクチュア

第5段落 (364)「一定量の原料、たとえば製紙マニファクチュアの…」 ～ (注36)まで

- いろいろな細部労働者が結合されてできている全体労働者は、道具で武装された彼のたくさんの手のなかで、一定量の原料の加工をその段階的過程の時間的継起を空間的並列に変え、同じ時間でより多くの完成商品を生給する。

引続き有機的マニファクチュアについて分析しています。
例会では、バケツリレーのイメージで

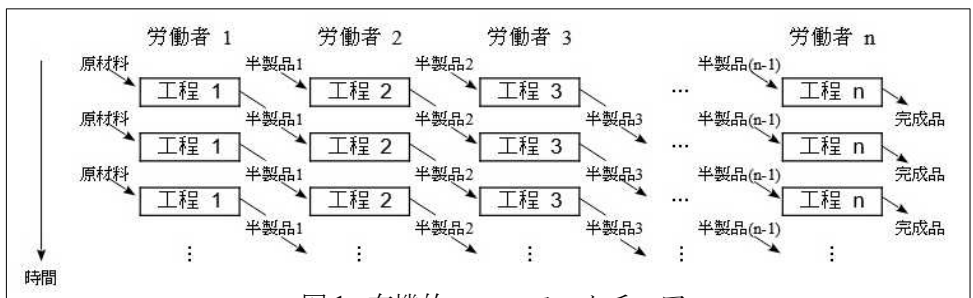


図 1. 有機的マニファクチュア

考えましたが、これを図1のようにすると分かりやすいかも知れません。

各工程で出来上がった半製品は次の工程の原材料になっています。従って、「作業場を一つの全体機構として見れば、原料はすべてその生産段階で同時に見いだされ」ます。

また、「いろいろな段階的過程が時間的継起から空間的並列に変えられている」ことは一目瞭然です。労働者1は工程1に、労働者2は工程2に、というように、同じ細部作業に同じ労働者を釘づけすることで、同じ時間でより多くの完成商品を生産できるという訳です。

第6段落 (365)「それぞれの部分労働者の部分生産物は、同時に、…」 ～ (注38)まで

- マニファクチュアでは、労働と労働とのあいだの直接的な依存関係によって、労働の連続性や一様性や規則性や秩序が、ことにまた労働の強度が生みだされ、一定の労働時間で一定量の生産物を供給するということが生産過程そのものの技術上の法則になる。

ある部分労働者の生産する部分生産物(半製品)は、次の労働者に彼の工程の原料として入ります。だから個々の部分労働者の労働は分業によって互いに有機的に密接に関連し、争っていることになります。各工程に必要な労働時間は経験によって確定します。マニファクチュアの全体の機構は、それを構成する各労働者が一定の時間には一定の成果が得られるということを前提にして成り立ちます。こうして、全体の機構の各労働は、互いに補いながら、並列して、同時に、中断なく進行していきます。

結果、個々の労働と労働・個々の労働者と労働者の直接的な依存関係が、全体機構を維持するための条件・強制となります。

第7段落 (366)「とはいえ、いろいろな作業は、等しくない長さの…」 ～

- マニファクチュア的分業は、社会的労働過程の質的な編制とともにその量的な規準と均衡をも発展させる。

図1で考えると、各部分労働者がある一定の生産物を生産するのに必要な労働時間は等しくなければなりません。すると、各工程で供給する部分生産物(半製品)の量を同じにするために、各工程の労働者数を調整する必要が生じます。

本文では具体例として活字マニファクチュアが取り上げられ、鑄造・分切・磨きの各工程に必要な人員は4対2対1の比率になる、ということでした。

マニファクチュア的分業は、多数の労働者が単純に協業するということにとどまらず、社会的な労働過程の質的な編制と同時にその量的な基準と均衡をも発展させる、ということになります。以下の段落でそれを具体的に見ています。

第8段落 (366)「いろいろな部分労働者群の最も適当な比例数が…」 ～ (注39)まで

- いろいろな部分労働者群の最も適当な比例数が一定の生産規模について経験的に確定されているならば、この規模はただそれぞれの特異な労働者群の倍数を使用することによってのみ拡大することができる。
- なお、監督労働、部分生産物を一つの生産段階から別の生産段階へと運ぶ労働などは、生産規模の大小と関わりなく必要となる。

比例数とは比率という意味のようです。図1で、労働者数の比率、つまり、

(労働者1の人数) : (労働者2の人数) : (労働者3の人数) : … : (労働者nの人数)

が決まっている場合、このマニファクチュアを生産量を拡大するには、この比率通りに労働者数を増やす必要がある、ということです。

第9段落 (367)「各個の群、すなわち同じ部分機能を行なう何人かの…」 ～ (注40)まで

- 同じ部分機能を行なう何人かの労働者の一団は、同質の諸要素から成っていて、全体機構の一つの特殊器官になっている。

いろいろなマニファクチュアでは、この群そのものが一つの編成された労働体であって、全体機構はこれらの生産的基本有機体の重複または倍加によって形成される

マニファクチュアによっては、ある部分工程の労働者群そのものが一つの要素となっていて、これを増加すると、全体量を増加させられる、ということでしょうか。

例として取り上げられているガラス瓶マニファクチュアの製造工程は、

①準備 原料の混合・融解

②製造 融解炉の口からのガラスのを取り出し、瓶を製造する。

炉の口は複数。それぞれに労働者のチームが付き、分業で製造する。

③最終 乾燥炉からの瓶の取り出し・品分け包装

の3段階に分かれています。②の製造では、炉の口の数だけ協業が行われます。

第10段落 (368)「最後に、マニファクチュアは、そのあるものが…」 ～

- マニファクチュアは、さらにいろいろなマニファクチュアの結合に発展する場合があります (結合マニファクチュア)。

- 結合マニファクチュアは、一つの全体マニファクチュアの多少とも空間的に分離された諸部門をなしていると同時に、それぞれが固有の分業をとまう互いに独立した生産過程をなしている。

- 結合マニファクチュアは、その基礎の上では技術的な統一を達成していない。これは結合マニエフテクチャがさらに機械経営へと発展することで達成できる。

ここでは次のような例が取り上げられています。

- ①生産手段のマニファクチュアが生産物製造のマニファクチュアと結合する例として、大きいガラス製造工場が自前で粘土の坩堝窯を製造するケース

- ②生産物マニファクチュアが、その生産物を利用する生産物マニファクチュアと結合する例として、ガラス研磨や銅鑄造と鉛ガラスマニファクチュアが結合するケース

第11段落 (368)「マニファクチュア時代は、商品生産に必要な…」 ～ (注44)まで

- マニファクチュア時代は、ある種の簡単な初歩的過程のための機械の使用を発展させた。ただし機械の利用は分業の添え物・脇役であった。

- 17世紀にまばらに現われる機械の応用が非常に重要なものになったのは、当時の大数学者たちに近代的力学の創造のための実際上の手がかりと刺激とを提供したから。

機械利用の例として、製紙マニファクチュアの製紙用圧碎機、冶金業の碎鉋機などが挙げられています。

大数学者の一人、ガリレイは、「新科学対話」(1638年)の中で、登場人物の一人サルヴィヤチ(新しい科学者)に「貴方がたヴェネチヤ市民の、あの有名な造兵廠での、日々たえ間ない活動は、研究者達の頭に、思索のための廣々とした働き場所を與へてゐるやうに思はれます。わけても機械の工作場が一番でせう。…」(岩波文庫)と発言させています。